2022年度

札幌日本大学中学校
入学選抜試験
【B日程（1月9日）】

国　　語

試験時間　60分

1．指示があるまで，問題冊子（さっし）を開いてはいけません。
2．答えは，解答用紙に記入してください。問題は，一～二までであります。
3．試験監督（かんとく）の先生の指示に従って，試験を開始してください。
4．試験の途中で，トイレに行きたくなったり，気分が悪くなったりした場合は，手をあげて試験監督の先生の指示を受けてください。
5．試験開始の指示があってから，解答用紙に「受験番号」「氏名」を記入してください。
6．解答用紙には，解答以外を記入しないでください。
7．試験が早く終わっても，周囲を見回したり，横を向いたりしてはいけません。試験監督の先生から注意を受けることがあります。
8．机の上には，筆記用具以外は置いてはいけません。風邪（かぜ）などにより，ティッシュペーパーを使用したい場合は，予（あらかじ）め試験監督の先生に申し出てください。

一

次の文章を読み、後の問に答えなさい。なお、設問の都合により本文を一部改変してあります。また、ぬき出しの問いや字数の指定のある問いは、句読点も一字に数えます。

①咳喘息という病気がある。

この本は病気をひとつひとつ丁寧に解説する医学書ではないので、詳しい説明はaハブくが簡単にイメージだけ書いておく。咳喘息は、咳の発作があるときに患者はとてもつらい思いをするけれども、咳がないときには検査をしても異常が見つからない病気だ。そして、患者が病院を受診するのはたいてい、症状がないときだ。

医者は、毎日のように咳で苦しんでいる患者に、まずは詳細な聞き取りを行う。夜間に呼吸が苦しくなりましたか、以前からこのような症状は出ていたのですか、bキセツによる変化はありますか、咳をするときどんな音がしますか、タンは出ますか、何かお薬を飲んでいますか、アトピー性皮膚炎にかかっていますか……。患者はそれに答えていく。

その後、聴診をして肺や気管支の音を聞いたり、ときにはレントゲンをとったり、呼吸機能検査を追加したり、血液検査をすることもある。

けれども、診察室で発作が起こっていない場合、決定的な証拠はなかなか見つからない。咳が酷くて夜中に救急車を呼んだけれど、病院についたときにはもう治まっていた、なんてこともある。

そういうときに、医者は、このような言い方を用いて、初回の行動を選択する。

「お話をうかがう限りでは、おそらく咳喘息でしょう。この吸引する薬を使ってみてください。使い方は看護師から説明しますので、守ってくださいね」

そして、さらにひと言、こう付け加える。

「もしこの薬を使ってみて、よくなったら、咳喘息です。引き続きうちに通ってください、薬を出しましょう。ただ、この薬が効かないようだと、他の病気の可能性があります。その場合は別の治療を行いますので、この薬が効いても効かなくても、またうちにかかってください」

この②「効いても効かなくてもまた受診してくれ」というセリフに、私自身は誠意を感じるのだが、それは事情をわかっている医者目線で見ているからかもしれない。患者目線からすると、きっとこのセリフの受け止め方は異なるだろう。

（なんだよ、咳喘息じゃないかもしれないのに、咳喘息の治療を始めるのか。ビシッと今日診断を決めてくれればいいのに。しかもまた病院来なきゃいけないのかよ……）

患者はもう少し、「早くわかる医療」を望むはずであり、医者のチンタラした対応には［A］不満だと思う。無理もない。わざわざ病院にかかったのに、その日に解決しないというのだから……。

でも、これは、咳喘息「疑い」の人に対するおそらく一番誠実な診療である。発作がないときに診療している限り、どうしたって情報が足りない。だから、咳喘息の可能性が高いとわかった時点で、［B］見切り発車のように咳喘息の治療を開始して、それが効くかどうか様子をみる。効果があれば、当初の読み通り、咳喘息と診断確定して、引き続き同じ治療を続ければよい。［C］薬が効かなければ、それはそれで、「咳喘息を否定する」という診断ができる。次に病院に来たときには、他の病気に対する検査を追加したり、治療を選びなおしたりすればよい。

この場合、医者は、薬が効いても効かなくても一歩前進だ、と思っている。時間をかけて手順を重ねればいずれわかるだろうと踏んでいる。「病気がわからない」のではなく、「行動すればいずれわかる」という考え方である。（※　中略）

医療というのは、時間軸を利用して行うべきものなのだ。時間の経過を、診断にも、治療にさえも利用する。薬を使ってみて、それが効いたかどうかを判断。ｃキジュンに採用することは、情報を集めにくいタイプの病気に対する行動を適切に選び取っていくための知恵だと考える。

ところがこれはあくまで医者の考え方であって、患者からすると［X］がある。

「喘息の治療が効かないとわかるまで他の検査をしないなんて、怠慢ではないか？」

「とりあえず効くかどうかわからない薬を投与するなんて、人体実験じゃないか？」

「見切り発車はやめろ」

気持ちはわかる。でも事情をわかってほしい。

（※　中略）

咳喘息というのは病気の性質上、診察室で百パーセントの診断を出せない。しかし、咳喘息が一番疑わしい、というと

ころまではたどり着く。私は先ほど「見切り発車」と書いたが、文字通り、ある程度までは「見切って」いる。③見切り発車というのは*ネガティブな意味を含む言葉だけれど、真の意味では見切ってから発車しているわけで、この場合はそれほど悪いことではない。確率をある程度見極めてから、「ある吸引薬が効くか、効かないか」という情報をdサグリに行っているのだ。高度で前向きな診療戦略である。

もっとも、医者側の意図を、患者が十分に共有していないときには、誤解が生じやすい。患者に「病気の正体がなかなかわからないから適当に治療薬を選んでいるのかな」と思われてしまっては申し訳ない。医療者の説明が足りなくて、診療の意図がわかりづらいとき、患者の病気に対する不安は増大してしまうだろう。

④このような病気を前にして、患者は何ができるか。何をすべきか。

まず、一度医者が出した薬が効かなかったときに、その医者をヤブ医者とeニンテイして次の医者に行くというのはあまりいい選択ではない、ということを知っておいてほしい。医者は、この薬が効かなかったらこっちだなと、二の矢、三の矢を放つ準備をしている。最初の薬が効かなかったという強力な情報を医者が手に入れることで、次の行動はより明確になる。それをしないで、医者を替えてしまうというのは、いかにももったいない。三手詰めの詰め将棋で、二手目で将棋盤をひっくり返してしまうようなものだ。

「医者はときおり、少し長い*スパンで治療を進めることがあるのだな」と*医療シアターの流れを*俯瞰することも役に立つ。名医ならどんな病気にも一発で薬が効き、昨日までふらふらだった自分が明日にはすっかりよくなる、というのは夢物語だ。診断が確定するまでに時間がかかるタイプの医療があると知るだけでも、精神的なストレスがだいぶ減るだろう。医者が最初に放つ矢に期待をかけたくなる気持ちは大変よくわかるが、医者が見据えている未来というのは、必ずしも一本道ではない。

（市原真著『どこからが病気なの？』筑摩書房）

【注】 *ネガティブ＝否定的。後ろ向き。
*スパン＝時間の幅。期間。
*医療シアター＝「シアター」とは劇場のこと。筆者はこれより前の本文で、医療は壮大な劇であり、複数の俳優たちがステージで作り上げるお芝居に似ていると述べている。また、劇場では医者・患者・患者の家族といった演者や観客など複数の目線が入り混

じっている。そういったイメージで医療をとらえるべきだとも考えている。

＊俯瞰＝高いところから全体を見渡（みわた）すこと。

【一部改変箇所】※印をつけて中略した箇所には、出題の都合上、省略がある。

問一　═══線部a～eのカタカナを漢字に直しなさい。ただし、大きくていねいに書くこと。

問二　本文中の空らん［　A　］～［　C　］に当てはまる最も適切な言葉を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし、一つの記号は一度しか使えません。

ア　あたかも　　イ　もし　　ウ　つまり　　エ　たぶん

問三　═══線部①「咳喘息という病気」とありますが、この病気で筆者が注目しているのは、どのような点ですか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　発作が起きると、夜中に救急車を呼ぶくらいに症状が酷いのに、病院に到着した時にはもう発作は治まっている、という点。

イ　発作が起きた時の症状が酷くて苦しいので、詳細な聞き取りを行うことで、すぐさま診断を確定させる必要がある、という点。

ウ　聴診で肺や気管支の音を聞いたり、レントゲンもとったり、呼吸機能検査や血液検査まで追加しなければならない、という点。

エ　薬を処方しても効くか効かないかは不明で、効かない場合は別の治療を行うために、引き続き通院することになる、という点。

オ　発作が起きた時は非常に苦しいが、発作が起きていない時は、様々な検査をしても決定的な証拠を見つけにくい、という点。

問四　――線部②「『効いても効かなくてもまた受診してくれ』というセリフに、私自身は誠意を感じる」とありますが、筆者が「誠意を感じる」のはなぜですか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　現時点では診断確定できないことを患者に説明し、自分の診断能力の無さを謝罪した上で治療を進める、謙虚で親切なやり方だから。

イ　処方した薬の効き方によって診断が違ってくることを患者に説明し、その上で治療を進めていくという、慎重で確実なやり方だから。

ウ　薬が効くかどうかによって、複数の病気の中から可能性の低い病気を一つずつ潰して診断を確定させる、高度で丁寧なやり方だから。

エ　病気の診断がまだできないことを患者に一通りは説明し、最初の薬を処方した後で治療方針を立てる、丁寧で注意深いやり方だから。

オ　時間はかかるけれども、薬が効いても効かなくてもその度に診断をやり直し別の治療を行っていく、臨機応変で柔軟なやり方だから。

問五　本文中の空らん［　X　］に当てはまる最も適切な言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　絶望感　　イ　劣等感　　ウ　違和感　　エ　罪悪感　　オ　危機感

問六　――線部③「見切り発車というのはネガティブな意味を含む言葉だけれど、真の意味では見切ってから発車している」とありますが、筆者の言う「見切り発車」とはどのようなやり方の診療ですか。本文中の言葉を用いて、五十字以内で説明しなさい。

問七　――線部④「このような病気を前にして、患者は何ができるか。何をすべきか」について、次の各問いに答えなさい。

(1)　「このような病気」とは、どのような病気ですか。本文中から十五字以内でぬき出して答えなさい。

(2) 筆者は「このような病気」になってしまった患者は、どのように心がけるのがよいと言っていますか。次の中から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア　医者は患者とは違う目線で未来を見据えているので、治療の効果がなかなか出ない場合でも、自分勝手に薬の服用を止めたり、むやみやたらに医者を替えたりしないように心がける。

イ　医者は初めから複数の病気の可能性を想定して同時に治療を進めているので、投薬の効果がなくても患者はもっと医者を信頼して、医者を替えるという選択をしないように心がける。

ウ　投薬の効果がなくても医者を替えず、時間軸を見渡して、病気とは治療に時間がかかるものだと思い直し、医者の説明をよく聞いて医者と同じ未来を見据えるように心がける。

エ　処方された薬が一度効かなかったというだけで医者を替えず、長期的な見方で診断と治療を行う必要のある病気もあるのだと知り、医者側の意図も考えてみるように心がける。

オ　医者が一度目に出す薬は効かないことが多いので、そこに大きな期待をかけず、二度目三度目の投薬があるという長期的な視点に立って、薬が効くのをじっくりと待つように心がける。

二

次の文章を読み、後の問に答えなさい。なお、設問の都合により本文を一部改変してあります。また、ぬき出しの問いや字数の指定のある問いは、句読点も一字に数えます。

「①とにかく治すしかないわね」
真鈴が悲愴な面持ちで言った。
「だったら、早く接骨院へ行ってきなさい」
母がうながす。
「うん」
支度をしようと立ちあがった真鈴は顔をしかめた。
昨日はかすみがうらマラソンに出場した。茨城県で行われている伝統あるマラソン大会だ。目標の多摩川ウルトラマラソンの一か月前だから、最終調整になる。湘南はなんとか完走したものの鳥取は途中の関門に引っかかってしまったから、かすみがうらではどうしても完走して本番の多摩川につなげたい。真鈴はそんな意気込みを持ってレースに臨んだ。
調子は悪くなかった。鳥取の前はロング走が足りていなかったので、長めの練習もこなした。だが、結果は最悪だった。かすみがうらマラソンのコースは前半にアップダウンがある。ここをいかに力をセーブして走り、後半のフラットな部分に備えるかがポイントだ。
しかし、真鈴は鳥取のときと同じ失敗をしてしまった。関門を気にして、初めから力んでしまったのだ。アップダウンのあるコースでむやみに力むと、ふくらはぎに負担がかかる。真鈴の場合もそうだった。二〇キロ手前で、左のふくらはぎにピリッという違和感が走った。後半になると、その違和感ははっきりとした痛みに変わった。二五キロでいったん止まり、屈伸運動などをしてみたが、症状はいっこうに良くならなかった。
「本番は来月なんだから、無理しないで歩きなさい」
並走する母はそう勧めたが、一応まだ自己ベストを上回るペースだった。②未練があった。
「三〇キロまで粘ってみる」
真鈴は母に言った。

「リタイアも考えて。悪化させたら、肝心の多摩川に出られないから」
母は心配そうだった。
「わかった」
しかし、三〇キロを超えたところで走れなくなった。速歩きも難しいほどで、自己ベストの望みは完全に断たれた。残りの距離といまのペースを考えたら、完走も無理だろう。鳥取に続いてリタイアかと思うと、真鈴は情けない気持ちになった。
沿道のれんこん畑で蛙が泣くのどかな田園地帯を、真鈴はゆっくりと歩いた。鳥取マラソンに続いて、母も付き合ってくれた。
次の関門でずいぶん待って収容バスに乗り込んだ。みんなリタイアしたランナーだから、車内はAお通夜みたいな雰囲気になるのが普通なのだが、そのバスは少し趣が違った。
力は出し切れた。ここまで走れて良かった。
あるランナーの思いがバス全体に伝わって、みんなで祝福するムードに包まれたからだ。
かすみがうらマラソンはブラインドランナーの選手権大会を兼ねている。全国から目が不自由なランナーが集まり、クラスに応じてベストを尽くす。多くの往年の名ランナーも伴走ランナーとして参加していた。
真鈴と母の近くに座った中年男性は、不運な事故による途中失明者だった。仕事も退職を余儀なくされ、絶望のどん底に沈んでいたとき、この大会のことを聞いた。
暗闇に一点の光が灯るように、*かそけき希望が生まれた。それ以来、少しずつリハビリに励んできた。運動神経はまったくなかったのだが、ブラインドランナーをサポートするクラブに登録し、伴走ランナーを紹介してもらって一からランニングを始めた。そして、ついに今日の晴れ舞台を迎えたのだった。
「脚の状態が*芳しくなかったので、いけるところまでいくつもりだったんです。ここまで走れて、沿道から声援をたくさんいただいて……もうそれだけで感激でした」
サングラスをかけたランナーは、感慨深げに言った。
「よくがんばったね。伝わってきたよ」
伴走をつとめたランナーは、感極まったような顔つきをしていた。

「来年は完走ですね」
真鈴は声をかけた。
③収容バスに乗りこんだときは泣きたいような気持ちだったのだが、ブラインドランナーの話を聞いて、急に気分が晴れた。
「ええ。いい目標ができました。仕事とともに、がんばりますよ」
④長い夜を抜けてきたブラインドランナーは、さわやかな声で答えた。聞けば、理解のある企業に再就職が決まり、パソコンを操りながら業務にも取り組んでいるらしい。
それから、真鈴は伴走ランナーともしばらく話をした。
「わたしもいずれ勉強してやってみたいです」
「それはぜひ。目の不自由なランナーの立場になって考えながら指示を送らないといけませんから、とても勉強になりますよ」
伴走ランナーは笑顔で言った。
「人生の勉強にもなりそうです」
真鈴は言った。
「なります」
すぐさま返事があった。
「ブラインドランナーの数だけ人生があって、背負っているものがありますから、一緒にゴールできたときは本当にぐっと来ますよ」
伴走ランナーの声に力がこもった。
収容バスを出て別れるとき、たまたま乗り合わせたランナーたちは、リタイアしたブラインドランナーに口々にエールを送った。
「お疲れさま、来年がんばって」
「今度こそ完走してください」
「また会いましょう」

真鈴と母も握手をした。
「ありがとう」
見えなくなってしまった目にいっぱいの涙をためて、ランナーは差し出した手を握り返してくれた。なかなかに離しがたい手だった。

＊

そんなわけで、レース後の交流には収穫があったけれども、ここでふくらはぎを痛めてしまったのは[B]痛恨の出来事だった。とにもかくにも、治療をするしかない。真鈴は車で母が通っていた接骨院へ向かった。
治療を始める前に、体のバランスをチェックされた。案じていたとおり、体の使い方に問題があって、左のふくらはぎに負担がかかってしまったらしい。
「次のレースなどは決まっていますか？」
接骨院の院長がたずねた。
できるかぎり、「休め」とは言わないのが方針だとホームページに書いてあった。目標があるのなら、それを達成できるように患者さんとともに最大限の努力をするのが当院の治療方針だと明記されていたから心強かった。
「一か月後に走ることになってます」
「距離は？」
院長の問いに、真鈴は少し声を落として答えた。
「その……五〇キロなんですけど」
「五〇キロ？」
院長は驚いたように真鈴を見た。
「無理でしょうか。フルより長いけど、制限時間はそんなにきつくない大会なんですが」
「まあ一か月あるので、できるだけのことはやってみましょう。週に三回来られますか？」
院長はたずねた。

「うーん……二回でしたら」
真鈴が勤務する公立図書館は人手不足で、いろいろとしわ寄せが来ている。週末に一度、平日に一度が限度だった。
「わかりました。では、さっそく温熱治療から始めましょう。左のふくらはぎを痛めてしまうのは、反対側の右腰がスムーズに動いていないためだと思われます。そのあたりの治療も患部と並行して行いますので」
「よろしくお願いします」
ここでの治療だけが頼りだ。真鈴はていねいに頭を下げた。
整形外科は対処療法で、患部に湿布を貼り、痛み止めを与える。一方、接骨院にもいろいろあるが、母が前に通っていたここは、一見すると*迂遠なやり方で患部を元から治そうとする。骨折しているのならともかく、元から直してくれるほうがありがたいことはたしかだが、問題は間に合うかどうかだ。
右腰の温熱療法の次は、左ふくらはぎへの*マイクロ波の照射だ。そのあたたかさを感じながら、真鈴は考えを巡らせた。
もし間に合わなかったら、また来年に出ればいい。そう軽く考えようとした。
でも、パパに約束した。五〇キロの部をママと二人で完走して、⑤「心の多摩川ブルー」のゼッケンをパパにプレゼントするのだ、と。
それに、多摩川ウルトラマラソンを主催しているのは小さな*ＮＰＯ法人で、ほとんど家族経営のようなものだと聞いた。距離の長いウルトラマラソンの運営は大変で、伝統ある大会もスタッフの高齢化などで幕を閉じる例がいくつかあったらしい。来年も多摩川ウルトラマラソンが開催される保証はないのだ。
スタートラインに立てさえすれば、痛み止めを飲んででも走りきるつもりだった。とにもかくにも、先生の言うことをよく聞いて、治療に集中するしかない。
最後は個室で電気治療が行われた。だんだん刺激がきつくなっていく。強いほうが効くだろうと悲鳴をあげる寸前まで我慢したが、真鈴はとうとうギブアップした。
「我慢強いねえ」
院長が驚いたように真鈴を見た。

（倉阪鬼一郎著『永久のゼッケン　多摩川ブルーにほほえみを』出版芸術社）

【注】
＊かそけき＝かすかな。
＊芳しくなかった＝良くなかった。
＊迂遠な＝遠回りな。まわりくどい。
＊マイクロ波＝波長の短い電磁波で、電子レンジで加熱する際に用いられることが多い。
＊ＮＰＯ法人＝団体の構成員に収益を分配することを目的とせずに、社会的貢献活動を行う団体。

問一　次の各文は、本文中の表現です。各文中の――線部の中から、他と意味・用法がちがうものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　ここをいかに力をセーブして走り、後半のフラットな部分に備えるかがポイントだ。
イ　アップダウンのあるコースでむやみに力むと、ふくらはぎに負担がかかる。
ウ　二五キロでいったん止まり、屈伸運動などをしてみたが、症状はいっこうに良くならなかった。
エ　仕事も退職を余儀なくされ、絶望のどん底に沈んでいたとき、この大会のことを聞いた。
オ　暗闇に一点の光が灯るように、かそけき希望が生まれた。

問二　〜〜線部Ａ「お通夜みたいな雰囲気」、Ｂ「痛恨の出来事」とありますが、本文中での意味として最も適切なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

Ａ「お通夜みたいな雰囲気」
ア　気軽にしゃべれないおごそかな雰囲気
イ　気持ちが沈み陰気で重苦しい雰囲気
ウ　緊張感があってくつろげない雰囲気
エ　昔のことを思い出して感慨深い雰囲気
オ　衝撃を受け感情をあらわにした雰囲気

Ｂ「痛恨の出来事」
ア　予期していない出来事
イ　大変悩ましい出来事
ウ　驚きを隠せない出来事
エ　非常に残念な出来事
オ　涙の止まらない出来事

問三　本文中には回想シーンがありますが、どこからどこまでですか。最初と最後の五字をぬき出して答えなさい。

問四　――線部①「とにかく治すしかないわね」とありますが、この時の真鈴の心情の説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　目標とする大会一か月前の怪我は、足の調子を考えずに出場し母の忠告を無視した自分の責任なので、反省している。
イ　目標とする大会一か月前の怪我だが、骨折したわけではないので、自分の努力ですぐに治るはずだと意気込んでいる。
ウ　目標とする大会一か月前の怪我だが、ブラインドランナーのために自分は完走してみせようと、決意を新たにしている。
エ　目標とする大会一か月前の怪我で、悔やむ思いは尽きないが、まずは治療に専念しようと自分に言い聞かせている。
オ　目標とする大会一か月前の怪我は、自分が長距離ランナーに向いていない証拠なので、絶望に打ちひしがれている。

問五　――線部②「未練があった」とありますが、なぜですか。次の中から適切なものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア　自己ベストのタイムを出すと同時に、鳥取の失敗を繰り返すことなく、関門をうまくやり過ごすことができたから。
イ　ふくらはぎに違和感があるので、自己ベストのタイムを出すのはもちろん、完走することまで難しくなったから。
ウ　左足のふくらはぎの不調で二五キロ地点で立ち止まったものの、まだ自己ベストを上回るペースだったから。
エ　鳥取の失敗を教訓にしてロング走を始めたのに、その成果が発揮できず、本番につながる走りも無理になったから。
オ　自己ベスト更新のために出場したかすみがうらマラソンだったので、その目標をどうしても達成したかったから。
カ　本番のための最終調整として臨んだかすみがうらマラソンなので、何としても最後まで走りきりたかったから。

問六　――線部③「収容バスに乗りこんだときは泣きたいような気持ちだったのだが、ブラインドランナーの話を聞いて、急に気分が晴れた」とありますが、真鈴の気分が晴れた理由を説明したのが、次の文章です。この文章の空らんに入る最も適切な言葉を、指定された字数で本文中からぬき出して答えなさい。

【　Ⅰ（二十一字）　】と意気込んで臨んだのにリタイアすることになった自分を【　Ⅱ（四字）　】と思い、泣きたいような気持ちになった。しかし、ブラインドランナーが、リタイアしながらも【　Ⅲ（十一字）　】という気持ちでいることがわかって、暗い気持ちが消え去ったから。

問七　――線部④「長い夜を抜けてきたブラインドランナーは、さわやかな声で答えた」とありますが、この時のブラインドランナーの様子の説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　不運な事故の後は投げやりな生活を送っていたが、理解ある企業に再就職できて、明るい将来に喜びをかみしめている様子。

イ　不運な事故で退職するしかなかったが、伴走ランナーの支えで走ることができたので、新しい職場の仲間にも期待している様子。

ウ　不運な事故で絶望していたが、走ることくらいは自分にもできることが分かって、完走という目標に向け進み始めている様子。

エ　不運な事故で全てを失ったかに見えたが、思いがけずランナーとしての才能を発見し、自分の生きる道を見つけて喜んでいる様子。

オ　不運な事故は仕事も生きる希望も奪(うば)ったが、今は仕事も見つかり、完走という目標もできて、生きがいを取り戻(もど)している様子。

問八　――線部⑤「『心の多摩川ブルー』のゼッケンをパパにプレゼントするのだ」とあるように、真鈴は接骨院での治療中に「『心の多摩川ブルー』のゼッケン」に思い至りました。このことにより、多摩川ウルトラマラソンについて、真鈴の考え方にどのような変化がおきましたか。本文中の言葉を用いて、七十字以内で説明しなさい。

下 書 用 紙

下 書 用 紙